

平成二十九年十月吉日初版作成

我即神也の究極の真理と

大光明の共磁場

高嶋善三郎

目次

| | |
|----------------------------|----|
| 我即神也の究極の真理・・・・・・・・・・・・・・・・ | 3 |
| 急速に高次元の地球世界になる・・・・・・・・ | 4 |
| 究極の真理を体現してゆく方法・・・・・・・・ | 6 |
| 光明の言葉の偉力・・・・・・・・・・・・・・・・ | 8 |
| 神の五感をよみがえらせる・・・・・・・・ | 9 |
| 他者による相対的な評価に惑わされない・・・・ | 10 |
| 大光明の共磁場の重要な役割・・・・・・・・ | 10 |
| 五次元に上昇した大光明の共磁場・・・・・・・・ | 12 |
| 一般の個人でも直接宇宙神とコンタクトが出来る・・ | 14 |
| ある日突然、大きな宇宙神の力と結びついた・・ | 15 |

神人は今新しい段階に突入している・・・・・・・・15

お願い

より分かりやすくするため、ご感想があれば、お聞かせください。

例えば、この点について分かりにくいとか、どの点が心に響いたとか、新しい疑問があるなど、何でも結構です。お聞かせください。
次の連絡先にお問い合わせ致します。

(スマホ) 09033466619

(アドレス) zensan@peach.ocn.ne.jp

我即神也の究極の真理

昌美先生の『白光誌2005年10月21ページ』の解説によると、究極の真理「我即神也」について、次のように説明されています。

まず第一に、自らの内なる神を知ることであり、そこに何ら一切の対立は無く、執着も欲望もないということを知ることである。

そして、次のステップとして、自らの上に、神そのものを実現してゆくことにあるのである。

ということは、自分にも他の人にも、一切の犠牲も闘争も混乱も招くことなく、神そのものに至るプロセスを経て、愛、赦し、真を表現し、無限なる進化創造を体験してゆくのである。

自らの内に神そのものを見出し、神を体現してゆくことこそが、人類一人一人の天命である。そして他の人の中にも神を見ることこそが、究極の真理の神髄である。

昌美先生がこの真理を説明されたのは、1994年5月に我即神也の印が富士聖地において降ろされ、私たち人類の神性復活大成への道標として示されたと言えます。それでは、私たち人類は、どうして神性の実感を失ってしまったのでしょうか。

人間が神様（直霊）から分かれ、霊界、幽界、肉体界へと降り

てきたとき、神様（直霊）への想い（感謝）を疎んじ、五感六感に感ずるもの他は無いと思うさかさまな考え方や、真実は神仏と一体であり、本体は、自由自在な神霊である人間を、肉体や幽体という限定された器的、物質的なものと夢のような思い方をしたため、業生、即ち神のみ心から離れた、誤てる想念が生じたのである。

霊・魂・魄として三界（霊界・幽界・肉体界）に活動している分霊はしだいに肉体人間そのものになってきて、肉体外の六官（直感）直覚（神智）の衰えを見せ、すべてを五官の感覚にのみ頼ることが習慣づけられ、五官に触れぬものはないものと思うようになり、人間とは肉体であり、心（精神）とは、肉体の機関が生み出した働きであるとして、分霊の活動は分霊そのものとしては感じられないようになっていった。

さらには、業想念（誤てる想念）が生じた原因として、分霊（魂）が、地上界的な肉体身を纏っているため、本来は神の光の側にあるにもかかわらず、神の光が地球界の闇を進んでゆくにつれて、種々様々な動揺や変化が起こり、闇が崩れてゆく姿を自分と同一視してしまったことにより不安恐怖が生じたと五井先生は、解説されています。

この不安恐怖が分霊の自他一体感をなくして、自我意識を強くし、自己の肉体保存に終始する結果をもたらしたといえるのです。

急速に高次元の地球世界になる

それでは、何故今地球人類がこの真理に目覚めなければ、ならないのでしょうか。その訳を五井先生のお言葉から整理してみましよう。

まず第一に宇宙心の大調和の心は、次々と星々の世界を調和した世界に仕立て上げており、現在は、地球人類が完成されてゆく順番になっている。『白光誌』（1963年3月19ページ）には「今まで地球は何回も亡びている。六回亡びていることになっている。そして7劫（こう）で七回目に入ってきたわけです。一劫というのは、何十万年、何百万年といのもあるのです。そして今度はどうしても、地球が完全に平和になる。地球人が本当に神の子を現わす番になっているわけです。」と説明されている。

（注）第四劫に地球上に人類史上最古の、石造文化を建設したムー帝国が今の太平洋に、アトランティス大帝国が大西洋に出現し、当時は原爆や空とぶ円盤なども持った、古代最高の文明を築いたといわれるが、やがて宇宙神からの波動調整である、大転換期の劫末を迎え、突然の大爆発により、二つの大陸は大陥没を起こし、海底深く没し去ったと伝えられている。第五劫では、ノアの洪水という、歴史上最大の大洪水の伝説が残されている。

第二に、あらゆる波動の世界を進化させてゆくご計画の宇

宙神のみ心である進化というのは、その波動圏に住みながら、神のみ心そのものの高い広い微妙そのものの波動圏にも行き来できる心を持つようになることである。現在の地球の状態で言えば、アメーバから種々進化して動物になり、人類にまで進化してきたこの進化を、今度は心の世界の進化にむけかえてゆく、即ち、物質の世界と心の世界とが縦横十字に大調和して、神のみ心が全き姿をそこに現されることであるが、この宇宙神のみ心を知っている人がほとんどいない。

第三に、神のみ心がまともはこの地球に現れるということ、非常に善いことではあるが、その力が現れる前に、不調和な状態にしがみついている人間が、その波動の調整に大変な苦しみを味わう。それがキリスト教でいう最後の審判ということなのである。一瞬に神のみ力がそのまま現れたのでは、地球の古代時の文明のように肉体人間の世界が急速に浄化して、形の世界が消滅してしまう。つまり三次元の世界が無くなって、急速に高次元の世界にうつりかわってしまうことになる。

第四に、そこで高次元世界の波動に合わせて、しかも三次元世界に現れている人間が必要になってくる。こういう人たちを、仏菩薩、または天使というのである。神々や宇宙天使は、こういう人たちを一人でも多く養成しようとして、今盛んに働

いていらつしやるのである。

ここで、五井先生が仏菩薩、または天使と言われているのが、まさに現在活躍されている、神人なのです。

「宇宙にはいくつもの星座があり、数多くの星があります。そして、宇宙心の大調和の心は、次々と星々の世界を調和した世界に仕立て上げていっているのです。そして現在は、地球人類が完成されてゆく順番になっているのです。しかし、地球という物質体が出来上がり、そこに肉体をまとった人間が生まれ、本来の霊質の地球や人間が、物質体になったためのマイナスが、いわゆる業といわれ、原罪といわれる、人類の不幸、災難の元となる波動なのであります。これも大宇宙の無限のひろがり、無限の進化の一駒としての在り方でありまして、霊体が一度物質体となり、そして物質体を持ったまま、しかも霊質も同じような働きのできる状態にまで進化してゆくことになるのであります。釈尊が人間は顛倒夢想（てんどうむそう）している、つまり逆立ちしているのだ、といったのは真理でありまして、肉体が人間ではなくて、霊なる人が肉体波動として、この地球界に現れている、ということなのであります。いいかえますと、真実の人は神仏の体であります。宇宙の微妙な波動の世界において、この物質地球界を進化させるために、肉体人間という粗い波動

の世界に天下ってきているのである、ということなのです。

宇宙神のみ心は、あらゆる波動の世界を進化させてゆくご計画なのですから、進化というのは、その波動圏に住みながら、神のみ心そのものの高い広い微妙そのものの波動圏にも行き来できる心を持つようになることなので、アミーバから種々進化して動物になり、人類にまで進化してきたこの進化を、今度は心の世界の進化にむけかえてゆく、ということ、物質の世界と心の世界とが縦横十字に大調和して、神のみ心が全き姿をそこに現されることになるのであります。」『人類の未来』183ページ)

「神のみ心がまともはこの地球に現れるということ、非常に善いことではありますが、その力が現れる前に、不調和な状態にしがみついている人間が、その波動の調整に大変な苦しみを味わうことになります。それがキリスト教という最後の審判ということなのであります。神のみ力がそのまま現れてくるようなことになりまして、三次元の世界に、一瞬にあらゆる眼にも見え、耳に聞こえなかった存在が出現してくる、無限次元につながる世界が現れてくるのであります。しかし、そう一瞬に神のみ力がそのまま現れたので、先程申し述べましたように、肉体人間の世界が急

速に浄化して、形の世界が消滅してしまいます。つまり三次元の世界が無くなって、急速に高次元の世界にうつりかわってしまうということになります。

そこで、高次元世界の波動に合わせて、しかも三次元世界に現れている人間が必要になってくるのです。こういう人たちを、仏菩薩、または天使というのであります。神々や宇宙天使は、こういう人たちを一人でも多く養成しようとして、今盛んに働いていらっしゃるのです。そういう菩薩や天使の犠牲によって、この肉体人間たちが苦痛少なく、無限次元とのつながりを得ることに、大きな人類の進化を成し遂げてゆくことになるのであります。」（『本もの贖もの』（161ページ））

究極の真理を体現してゆく方法

この究極の真理を体現してゆく方法として『人間と真実の生き方』を實踐し、我即神也、人類即神也の宣言文を宣言し、それぞれの印を組む。また呼吸法の印を組む。地球感謝行、光明思想徹底行を行うとともに、マンダラを謹書するなどをあげられます。

『人間と真実の生き方』の神髄は、端的に言えば、「消えてゆく姿で世界平和の祈り」であり、その意味するところは、世界

平和の祈りをすれば、救世の大光明が輝き、本心と業想念の區別が出来るようになり、業想念を消えてゆく姿にし、大光明の中に投げ込むことにより、把われを放ち、内なる神（本心）を体現できるということです。

これは、まず実践しないと、実感はわからないことなのですが、どういう感覚になるのか、実践した体験から、説明してみましよう。

業想念とは、先ほど言及した、この肉体世界しか存在しないという錯覚から形成された誤てる想念波動というもので、肉體想念ともいわれています。その想念は、不安、恐怖、怒り、苦しみ、悲しみ、嫉妬心などの感情を伴って不調和の姿（不幸や貧乏や病など）となって現われてくるのです。人類が過去世からこの業想念を放ってきたため、地球を厚く覆っており（これは業想念の意識の場というべきもので後で言及します）、私たちが些細な業想念でも発すると、その想念に引き寄せられて個人だけではコントロールできないほどの不調和の感情想念を伴って現われてくるといわれています。

一方本心の働きとは、外部の神々と交流しあっている、人間の内部に存在せしめている神の一番奥の神の姿を、直霊とい、その分かれとして存在しているのを分霊といい、直霊、分霊の働きを云います。そしてこの直霊分霊の働きを真っ直ぐになさしめるために、外面的に働いているのが、守護霊なのであ

り、守護神なのです。

不調和な状態は、守護霊、守護神が、人間の、愛と調和と美の世界をこの肉体界に現わすという天命を果たさせるために、本心を覆っていた業想念（潜在意識・幽体のなかに蓄積されている業想念）を浮き上がらせ、消してゆく（光に還元されていく）時に現われてくるものと言われているのです。

この消えてゆく姿は、世界平和の祈りの中に入れて、消していただいているのだと、守護霊、守護神に感謝していれば、再び不調和の状態は出てこないといわれているのです。

しかし、消えてゆく姿に意識をあわせると、新たに業想念にエネルギーを与えたことになり、再び同じようなことが現われてくるのです。それ故、真理をはっきり知り、対処することが大切で、そうでないと、たとえ一旦自分の本心を意識しても、自分の想念の癖（因果律に照らして考える）により、業想念を無意識のうちに引き寄せてしまうのです。

このようにどのような困難の中にあっても、過去の誤った想念行為が消えてゆくのだという強い信念と善念を起し、消えてゆく姿として世界平和の祈りの中に、入れてゆくという五井先生のみ教えをさらに一歩進め、消えてゆく姿への把われを出来る限り最小にするため、消えてゆく姿をいろいろと詮索しな

いで、ただ自分の未来に関する希望や出来事、そして輝かしい人生の設計図を強く思い、“成就” “必ずなる” “絶対大丈夫” “すべては可能” “すべては完璧” “すべては大調和”・・・など光明の言葉を心の中に、魂の中に強くインプットすることを提唱されたのが昌美先生の果因説といえます。私たちは、過去世から現在に至るまで、すべて因果律の法則に照らして霊性開発すべきだという固定観念があり、常に過去世に思いを向けてしまう。その固定観念を打破するために昌美先生が提唱されているのです。

この考えをさらに一歩進めて、日頃より、自分の潜在意識（幽体）に蓄積されている業想念を光明化しておくことが実に効果があります。

今私たちは真理の祈り、我即神也や人類即神也の印、呼吸法、光明思想徹底行、地球感謝行などにより、自分の肉体の周りと富士道場とに光を降ろしており、私たちの潜在意識は急速に光明化されてきており、本心を実感できる状態にあります。

本心を実感できたという方々の感想をお聞きすると、静寂そのものと答えられる方が多いようです。その他の感想としては、喜びに満ち、すべてに感謝している自分と云うのがあります。静寂などの状態になると、業想念そのものがどういふものなのか直観として分かり、どのような不調和状態になっても、その不調和な状態を乗り越えてゆく勇氣と智慧が湧き出てくると

いわれています。

本心の働きである、愛と調和と美の姿を日常的にかつ積極的に現わしていけば、その実感はさらに強くなっていくということでしょう。

光明の言葉の偉力

先ほど言及した、光明思想徹底行に関連して、昌美先生は、光明の言葉と否定的言葉とを比較し、光明の言葉の本質を解説されています。そして人類一人一人の遺伝子の中には我即神也の絶対的な光明の真理が刻印されており、光明なる言葉を意識して語りつづけるならば、自らの内なる宇宙神のひびきと共鳴し、輝かしき、素晴らしきものを自然と自らに引きつけ、人生を大転換せしめてゆくと、昌美先生は常に光明の言葉を使うことの大切さを解説されています。

「光明の言葉は、光明の音、ひびきを放ち、音の持つ法則により、真理なるもの、善きもの、素晴らしきもの、輝かなるものを引きつけ、結び付け、推進してゆくのである。

逆に否定的言葉は、音の法則により、斥力（せきりょく）となって、悪しきもの、不幸なもの、暗黒なるものを排除し続けてきたのだが、人類があまりにも否定的な言葉、否定的な音、否定的なひびきを創造しつづけたた

め、ある時点でそれらを遠ざけようとする斥力の力が及ばなくなり、ついに悪しきもの、不幸なもの、病などを引きつけるようになってしまったのである。

光明の言葉を語ることによって、その言葉の持つひびきにより、物質にその力が吹き込まれ、あらゆるものが建設され、進化創造してゆくのである。光明の言葉は、調和と平和をもたらしてゆく偉大な働きがあるのである。

音は波動である。波動は物質となる。ゆえに、光明の言葉のみを使いこなすならば、一〇〇パーセント、あなたの人生に幸せと平和がもたされるはずなのである。

人類一人一人の遺伝子の中には「我即神也」の絶対的な光明の真理が刻印されているのである。ゆえに、光明なる言葉を意識して語りつづけるならば、自らの内なる宇宙神のひびきと共鳴し、輝かしき、素晴らしきものを自然と自らに引きつけ、人生を大転換せしめてゆくのである。

ゆえに、人間は常に聖なる言葉、創造的な言葉を語りつづけることが大切なのである。聖なる言葉とは、真理の言葉、「世界平和の祈り」「人間と真実の生き方」「我即神也」「人類即神也」などのような、宇宙神より啓示された崇高なヴァイブレーションを放つ言葉であ

る。『白光誌』2003年10月16ページ」

神の五感をよみがえらせる

また、五感に意識を集中させることにより、五感の能力を高め、今まで感じたことも、見たことも、聞いたことも、嗅いだことも、触れたこともない領域の波長を体感できるようになる。自分の五感を通して自らを守り、次にとるべき行動を決定することが出来るからである。これこそが直観であり、叡智である。真剣に意識を集中させるということは、必然的に自らの内部、中心核に繋がるといことなのである。

そして我即神也の真理の、日常生活の小さな体験の結果から心に自信を与え、よろこびと幸せを噛み締めてゆくことが大事なのである。それを積み重ねてゆくと、ある時世界的な大災害や突然の状況に立たされたとしても、日頃の光明思想徹底行の積み重ねで、すべてのいかなる状況からも逃げず、恐れず受容する心構えが出来、いかなる大難も小難に変え、さらには自分を含め自分の周りが、すべて無傷で終わってしまうのであると解説されています。

「一般に、人々はただ漠然と、なすがままに、在るがままにまかせてしまっている。この場合、五感の能力は、三十パーセント程度しか働いていない状態である。一方、意識を集中させることにより、五感の能力は八

十パーセントにまで高まり、今まで感じたことも、見たことも、聞いたことも、嗅いだことも、触れたこともない領域の波長を体感できるようになるのである。

人間の五感はある一定の情報(周波数)を感じ取り、それを脳に伝達するが、それ以上、あるいは、それ以下のものは、感じて意識にのぼらない。

だか、五感の一つ一つに意識を集中させることにより、人は毒物を嗅ぎ分けたり、遠くの音を聞き分けて異変を察知したり、未だ自分の前に見えてこない人や物を見る事が出来るようになるのである。

ということとは、五感を発達させることにより、他の人よりも生き残る可能性が高まるのである。自分の五感を通して自らを守り、次にとるべき行動を決定することが出来るからのである。これこそが直観であり、叡智である。

人間の能力には限界がないことを知るべきである。

真剣に意識を集中させるということは、必然的に自らの内部、中心核に繋がるといことなのである。実はそれこそが、究極の真理、「我即神也」に直結するという行為そのものなのである。

事実、究極の真理そのものがわからなくとも、自らの意識を中心核につながることによって人は真理を体得できるのである。そして、超エネルギーを噴出さ

せ、自らの上に不可能を可能にさせる現象を次から次ともたらしめてゆけるのである。『白光誌』2005年2月11ページ』

「我即神也」の真理も、日常生活の小さな体験の結果から心に自信を与え、よろこびと幸せを噛み締めてゆくことが大事なのである。それを積み重ねてゆくと、ある時世界的な大災害や突然の状況に立たされたとしても、日頃の光明思想徹底行の積み重ねで、すべてのいかなる状況からも逃げず、恐れず受容する心構えが出来る、いかなる大難も小難に変え、さらには自分を含め自分の周りが、すべて無傷で終わってしまうのである。『白光誌』2002年11月20ページ』

他者による相対的な評価に惑わされない

さらに、自分と人との能力等の差、また他者の評価等を気にしないで、自らの神性一点一方に意識を集中し、魂と精神を磨き高め上げてゆくことが真実の人生であると、昌美先生は解説されています。

「心が外に向けられると、必然的に他の人のことが頭に、耳に、眼に入ってくる。そのため他者による相対的な評価に常に惑わされるのである。自分と人との貧富の差、能力の差、優劣の差、幸不幸の差、美醜の差、運命

の善し悪しの差・・・そして他者の評価や非難、批判が気になる。要するに、他者に向けた偽善的な自分の人生をつくり上げ、それに沿って生きざるを得ないのである。全くナンセンスである。自らの神性一点一方に意識を集中し、魂と精神を磨き高め上げてゆくことこそ真実の人生である。他者の生き方とは全く無関係のことなのである。ましてや他者の評価など全く意味をなさない。それらはむしろ邪心であり、誘惑の種である。

要するに、人類一人一人は常に、自らの意識を自らの神意識に向け集中し、他者の評価や批判、非難などに對して一切心を惑わせず、感情移入しないことである。

（『白光誌』2008年4月11ページ）

大光明の共磁場の重要な役割

究極の真理「我即神也」を体現してゆく上において、究極の真理のエネルギーが満ち溢れている「共磁場」が極めて重要な役割を果たしています。究極の真理に導かれ、「我即神也」「人類即神也」を理解し、祈りや印、呼吸法を行なっている人々は、「みな究極の真理のエネルギーが満ち溢れている「共磁場」へと導かれ、つながってゆくのである。そして、その「共磁場」の大光明のエネルギーが倍加され、増幅され、いかなる不可能も可能にしてしまうほど、すべてが成就へと導かれてゆくのであ

ると解説されています。

「我々人類を、そして生きとし生けるものを取り巻いている宇宙空間は、空っぽではないのである。単なる真空状態ではないのである。真空は一般に考えられているような空虚な空間ではなく、そこに、「氣」、「意識」のエネルギーがあり、さまざまな波動でできた「場」で満ち溢れているのである。かつまたそれぞれの波動はすべて、必ずある一定量のエネルギーをもって存在しているのである。

宇宙は種々さまざまなエネルギーが遍満する「意識の場」であり、そこには千差万別の「場」が存在しているのである。しかもそれぞれの「場」は、人類一人一人の意識によってつくり出され、その上、人類一人一人により想念エネルギーが注ぎ込まれ、蓄積された場なのである。人類は日頃、自ら発している想念を通して、種々さまざまな「場」のエネルギーと結びついているのである。

究極の真理に導かれ、「我即神也」「人類即神也」を理解し、祈りや印、呼吸法を行なっている人々は、みな究極の真理のエネルギーが満ち溢れている「共磁場」へと導かれ、つながってゆくのである。そして、その「共磁場」の大光明のエネルギーが倍加され、増幅され、いかなる不可能も可能にしてしまうほど、すべてが成就へと導かれてゆくのである。それこそ無限に善いことのみが、

素晴らしきことのみが、幸せになることのみが奇跡のように次々現われてくるのである。

人類は日頃、自らの発している想念を通して、種々さまざまな「場」のエネルギーと結びついているのである。その日の気分により、その時の瞬間の感情により、否定的な想念を発すると、その発した想念と同じ波長の「場」へと一つにつながってゆくのである。自分ではそんなに否定的な想念を強く込めたつもりはなく、つい何気なしに軽い気持ちで無意識的に発した想念であつてきえも、それは想像以上に強い憎しみや嫉妬や差別の意識の「場」へと同調し、そこに引きつけられてゆくのである。結局自分自身の力ではどうにもならず感情の波に押し流されてゆき、自分も滅びの道を進んでゆくのである。

一方では、究極の真理に導かれ、「我即神也」「人類即神也」を理解し、祈りや印、呼吸法を行っている人々は、みな究極の真理のエネルギーが満ち溢れている「共磁場」へと導かれ、つながってゆくのである。そして、その「共磁場」の大光明、大生命、大調和、大成功、大繁栄、大進化創造のエネルギーが倍加され、増幅され、いかなる不可能も可能にしてゆくのである。それこそ無限に善いことのみが、すばらしきことのみが、幸せなることのみが奇跡のように次々と現われてくるのである。

この世では、人類一人一人の想念によって、数多くの物質化現象が生じているのである。

遠くの国で起こっている戦争や貧困、飢餓などに自身自身の想念が影響を及ぼしている。だが人類はだれも、そのマイナスの現実世界が自らの想念の具現化したものであるとは信じていないのである。

一方究極の真理を知っている人々はみな、自分の言葉、想念、行為に責任を持ち、限りなく神の光輝く姿を顕現させようと、日々、祈り、印、呼吸法を努力して行っている。善きこと、輝かしきことが具象化しはじめているのである。とくに2006年ころから、どんどん目に見えて善い現象、最高の現象が、次々と顕現されてきているのである。

人類一人一人全員の想念や意識がいかに大切であるかに思いを致さなければならぬのである。その想念、意識でさえも、少しの迷いや疑いや不信の念が入っていれば、成就へと導かれてゆかないのである。（『白光誌』2008年3月11ページ）

五次元に上昇した大光明の共磁場

富士聖地の大光明の共磁場は、どのようにして創造、誕生し

たのでしょうか。そして進化したのでしょうか。昌美先生が説明されている次元上昇のターニングポイントに焦点を合わせて整理してみましよう。

この大光明の共磁場は、地球を守護する神々の神庭会議において、宇宙神の究極の光を降ろされるグループとして、唯一白光真宏会が選ばれ、私たちの祈り、印、呼吸法等により2003年から降ろされ、創造、誕生、進化されて来ている。

2004年9月の『歴史の浄め祭』において、ついに無明界、地獄界、幽界に『光明の共磁場』をつくるためのあらゆる条件が整った。『光明の共磁場』が出来ることにより、これらの世界に棲む御霊たちは、肉体界に生まれ変わるチャンスが与えられ、輪廻転生を体験し、改めて、真理に触れることが出来るようになる。そうなれば、これらの御霊たちは、もはや、人類に障り、人類を脅かし、人類を悪に巻き込むことを止めるから、これにより初めて、世界の平和は確実なものとなった。

共磁場は最初、小さなものであった。出来たかな、と思っただら崩され、少し大きくなったかと思えば小さくなり・・・でも、皆様がコツコツコツ祈りつづけ、2007年の7月、12時間かけてエネルギーを注入して次元を高めた結果、いかなる悪をも吸収し、光に変え、すべてを真理に変え得る大光

明、大真理の共磁場が富士聖地に出来上がった。

究極の真理を知っている人々はみな、自分の言葉、想念、行為に責任を持ち、限りなく神の光輝く姿を顕現させようと、日々、祈り、印、呼吸法を努力して行っている、善きこと、輝かしきことが具象化しはじめているのである。とくに2006年ころから、どんどん目に見えて善い現象、最高の現象が、次々と顕現されてきている。〔『白光誌』2008年3月11ページ〕

2008年において、神人たちは宇宙神に直結する道への扉を少し開いた。

2009年7月5日の大神事は、見事に大成就、大成功を博した。4500人以上の崇高なる魂が富士聖地に参集し、果因説による大光明、大成就の磁場を創り上げた。その成果により、ついにこの富士聖地は地球上で唯一、四次元の場へと完璧に次元上昇を遂げた。

2009年10月3日、ついに昌美先生、会長代理、副会長、理事長、理事の七人でピラミッドに入るように五井先生のご神示があった。

昌美先生たちは、あまりにも強烈な波動の中、この肉体の工

ネルギーを、ピラミッドの宇宙究極の光と共神、共鳴、共同創造させられた。

一時間後、神事は成功し、五井先生から「よくやった」というメッセージが届いた。そして翌朝、改めて五井先生から「ピラミッドは維持会員の皆に平等に開いてよい」というメッセージが届いた。

2011年、神人が宇宙神の力と結びついた。

2012年7月大行事の大成就を果たした結果、これから生ずる大災難（政治経済の低迷、宗教対立、民族紛争、国家間戦争、疫病、原爆、テロ、あらゆる人智、あくなき欲望にて作り出してきた大カルマによる）を救いうる神力が調ったという秘神示があった。

2014年1月の新年祝賀祭において、「宇宙神の根源に汝らの魂は直結した」というご神示があった。

2016年7月の果因説による大成就の共磁場を創り上げる行事により第五次元の扉を開いたというご神示があった。

以上整理してみて、見えてきたことは、2003年から7年後に四次元に、そしてその7年後に五次元に富士聖地は次元上

昇したことでしよう。またその間その都度、重要なお神示をいただいています。そのお神示の内容について、みてみましょう。

一般の個人でも直接宇宙神とコンタクトが出来る

富士聖地が四次元に次元上昇する一年前の2008年において、神人達は宇宙神に直結する道への扉を少し開いたのである。

今まで聖者や賢者は別として人類一人一人が神や仏の道、宇宙神への道を直接行き来（交流）することは有り得なかったが、この宇宙神に直結する道への扉を開いた神人たちの出現により、一般の個人でも直接宇宙神とコンタクトが出来る時代に突入し、全人類が意識上昇、次元上昇する時が到来した。それは日本から始まるというお神示があった。

四次元に上昇した後の2012年「私たち神人はあらゆる大災難を救う神力を授かり、これからどのような大災害が起ころうとも、どんな神人の器に大生命力の光、パワーが注がれ、神人の存在するところから周囲に波及し、そこに共にいる人々は救われてゆく」というお神示があった。我々神人は、これからなお一層自らを磨き高め上げ、限りなく宇宙神の力を受け入れる器になり、限りなく自らを磨き高め上げるならば、宇宙神より神力を十倍授かることが可能となる。すると十万人の神人と同じ働きをすることになり、地球上におけるすべての予言は

覆されることになるであろうというお神示があった。

また、2014年に私たちの魂が宇宙神と直結し、我即神也の自分が表に出て、もう肉体感情にコントロールされない。すべてが成就する世界が、自分自身の魂によって表に出たというお神示があった。

さらに、五次元の扉が開かれた時、「五次元というものは、考えても想像がつかないかもしれないが、自分自身が神性そのものであるということをおふっと思い出す、思い出さざるを得ない、それが五次元なのである。どんな不安も恐怖もなく、仮にピストルの弾や天変地変が来ても、自分の次元が五次元にゆく。意識だけが行くのではなく、肉体もいつの間にか光の中に同化される。

それゆえどんな災い、どんな厳しい状況、どんな病原菌、どんな破壊にも侵されることはない。皆様方のミッションは完うされたのである。これからは絶対にこの世での不幸や欠けたるものはない。全部が完璧にそろってゆく。

そして「またすべては完璧、欠けたものなし、大成就」と唱えて、それにより、私たちの意識を内なる神性につなげ、これまで皆がこの言霊を唱えつづけて蓄積されたエネルギーを自由に使い、究極の真理「我即神也」の真理を体現していけばよい」という昌美先生のお言葉があった。

ある日突然、大きな宇宙神の力と結びついた

神人が宇宙神の力と結びついたのは、2011年のようです。2012年7月大行事の大成を果した結果、これから生ずる大災難を救いうる神力が調ったという秘神示があった一年前だということです。昌美先生の次のお言葉をみると、興味深いことがわかります。その時、神人はどのような状態であったのでしょうか。神人たちも初めから「自分が世界を変えてゆくのだ」という大使命感に裏打ちされて、日々祈っていたのではなく、祈りや印も、個人レベルのものとして謙虚に受け止めて、祈りや印を通して自らが向上し、大きく変わってゆくことに集中していたというのです。

これから言えるのは、私たち神人は、究極の真理「我即神也」を体現することに集中しておれば、宇宙神の方で、あとはすべて整えて下さるということでしょう。

「実のところ、神人たちも初めから「自分が世界を変えてゆくのだ」という大使命感に裏打ちされて、日々祈っていたのではなかった。祈りや印も、個人レベルのものとして謙虚に受け止めて、祈りや印を通して自らが向上し、大きく変わってゆくことに集中していた。それがある日突然、大きな大きな宇宙神の力と結びつき、ドアは見事に開かれていったのである。神人は、歴史が変

わるその瞬間、適切な時に適切な場所に居合わせるよう、今生に誕生してきていたのである。

ドアが開かれたことにより、人類の多くは、最初は半信半疑であったのが次第に真理に目覚めはじめ、自らの意志でもあって、そのドアから一步踏み出し、ついに世界の設計画を垣間見るのである。

今まで人類の前には“不可能”という大きな壁が立ちはだかり、人類は自らの存在を価値がないものと思ひ込み、信じ込んでいた。がこれからは全く異なる世界が現われるのだ。」(『白光誌』2011年7月12ページ)

神人は今新しい段階に突入している

富士聖地の大光明の共磁場の創造、進化について見てきましたが、私たち神人も進化させていただいたことも分かかります。

2006年ころから、神人たちにおいて、どんどん目に見えて善い現象、最高の現象が、次々と顕現されてきている。

2012年7月に宇宙神からこれから生ずる大災難(政治経済の低迷、宗教対立、民族紛争、国家間戦争、疫病、原爆、テロ、あらゆる人智、あくなき欲望にて作り出してきた大カルマによる)を救いうる神力を授かりました。そしてこれからなおり層自らを磨き高め上げ、限りなく宇宙神の力を受け入れる器に

なり、限りなく自らを磨き高め上げるならば、宇宙神より神力を十倍授かることも可能になりました。

また2014年1月の新年祝賀祭において、宇宙神の根源に私たちの神人の魂は直結し、我即神也の自分が表に出て、もう肉体感情にコントロールされなくなり、すべてが成就できるようになった。

さらに五次元の扉が開かれた時昌美先生から次のようなお言葉をいただいています。

どんな厳しい状況、どんな病原菌、どんな破壊にも侵されることはない。皆様は神性そのものである。皆が長い間積んだ陰徳。神界では皆の陰徳は、陰徳ではなく、徳を積んだ者として、皆の名前がだーっと聖徳〇〇、聖徳〇〇、聖徳〇〇・・・と刻まれている。皆のミッションは完うされたのである。これからは絶対にこの世での不幸や欠けたるものはないのである。全部が完璧にそろっていくと言われています。

以上端的に言えば、大光明の共磁場と一体となっている私たち神人は神性そのものになったということでしょう。

この9月に行われた地球黎明祭が、従来に比べ、昌美先生のご負担が少なかったことに、目を見張りました。グローバルの天災地変、事件、事故等により亡くなった方々を私たちのかざす掌から出る光、波動により浄めるように昌美先生からの指示

があり、それが大成就された時、富士聖地が五次元世界になったのだという実感をえました。

2008年、今まで聖者や賢者は別として人類一人一人が神や仏の道、宇宙神への道を直接行き来（交流）することは有り得ませんでした。この宇宙神に直結する道への扉を開いたことにより、一般の個人でも直接宇宙神とコンタクトが出来る時代に突入し全人類が意識上昇、次元上昇する時が到来しました。

これから全人類が意識上昇、次元上昇することに向けてさらに新しい展開がなされていくことでしょう。会員だけでなく一般の人々にもお伝えできる神性復活目覚めの印がその展開の中心の一つとなるのではないのでしょうか。

もう一つ忘れてはならないのは、因果律という固定観念を打破し果因説の世界（思い通りの世界）を開く、また富士聖地の大光明の共磁場から蓄積されたエネルギーを引き出すことが出来る「すべては完璧、欠けたるものなし、大成就」という言霊でしょう。この言霊を自由自在に使ってゆくことが重要になることでしょう。

私たち神人が今なすべきことは、これらの点に留意し、神性復活目覚めの印等を通じ、宇宙神と直結していることを常に思い起こし、私たちの意識を内なる神性につなげ、さらに究極の真理「我即神也」を体現していくことでしょう。